

《教育長メッセージ 第39号》

『なんでも屋』

学校は、「なんでも屋」です。

子どもにかかわること、教育と名の付くことは、すべてが学校に集まってきているのです。



このままでは、学校は、教職員はたまったものではありません。

それでは、学校が「なんでも屋」になる要因を2つの視点から述べてみたいと思います。

1つ目です。

本来、学校は、将来、自己実現を果たし社会の一員として幸せに生きるために、必要な学力や社会性などを身につける場です。

そして学校は、集団生活の場であり、集団での生活の仕方を学ぶ場であり、ひとりひとりの子どもの発達段階のしつけや生活習慣は身につけていることを前提にしています。(もちろん、その子の特性により身につくことが困難であるからとして、学習権を認めないということはあってはならないことですが。)

平たく言えば、家庭教育で身につけるべきことは、しっかりと家庭教育で行ってほしいということです。その上に立って、学校では、社会を想定して集団生活の中でのよりよい行動の仕方を学ぶのです。

例えば、学校で食べ物の好き嫌いをなくしてほしい。食べ方を上手にできるように指導してほしい。これはいかがなものでしょうか。子どもが夜更かしするので指導してほしい。子どもが、朝、寝坊するので電話をかけてほしい。これはいかがなものでしょうか。

近年、家庭教育でしっかりと身につけるべきことを学校の指導に委ねるケースが増えています。挙句の果てには、それらのことについて、学校の指導が悪いとクレームをつけるケースもあります。

家庭教育と学校教育がお互いにしっかりと責任を果たし、足りない部分はお互いに補完しながら子どもの成長を支えることが大切だと私は思うのですが、いかがでしょうか。

2つ目は、その時々さまざまな社会問題や多くの外部団体から、学校での学習活動への働きかけがあるということです。

学校での学習内容は、ナショナルスタンダードとして、全国どこにいても日本人としての共通な学習が行われるようにと学習指導要領に定めら

れています。それに沿って、学校では日々の学習活動を計画的に行っているのです。

もちろん、子どもたちのよりよい成長と将来のために、さまざまな新たな取組をすることは、必要なことですが、それが次々とやってくるのです。たくさんの冊子やパンフレットが学校に、子どもたちに届くのです。

そして、多くの方々からさまざまな取組の提案があります。

教育委員会や学校に、取組についての選択が任されていれば、まだよいのですが、「海老名市教育委員会は、〇〇学校は、取り組んでくれない。そんなことでよいのか。」と批判する方もいたりするのです。

今の学校の状況で、すべてを受け入れることができるでしょうか。子どもたちにとって本当に必要なことは何なのでしょう。

私はそう思うのです。

学校は「なんでも屋」にならざるを得ないところですが、「なんでも屋」ではないのです。

ただただ、子どもたち、教職員、学校をよろしく願っています。

次回は、「夏休み」について、子どもの頃の思い出を話してみたいと思います。